

(様式1)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名 (推進地域)	静岡県	番号	22
-----------------	-----	----	----

市町村名 (推進地区名)	協力校名	児童生徒数
伊豆市	伊豆市立修善寺小学校	133人
湖西市	湖西市立新居小学校	807人

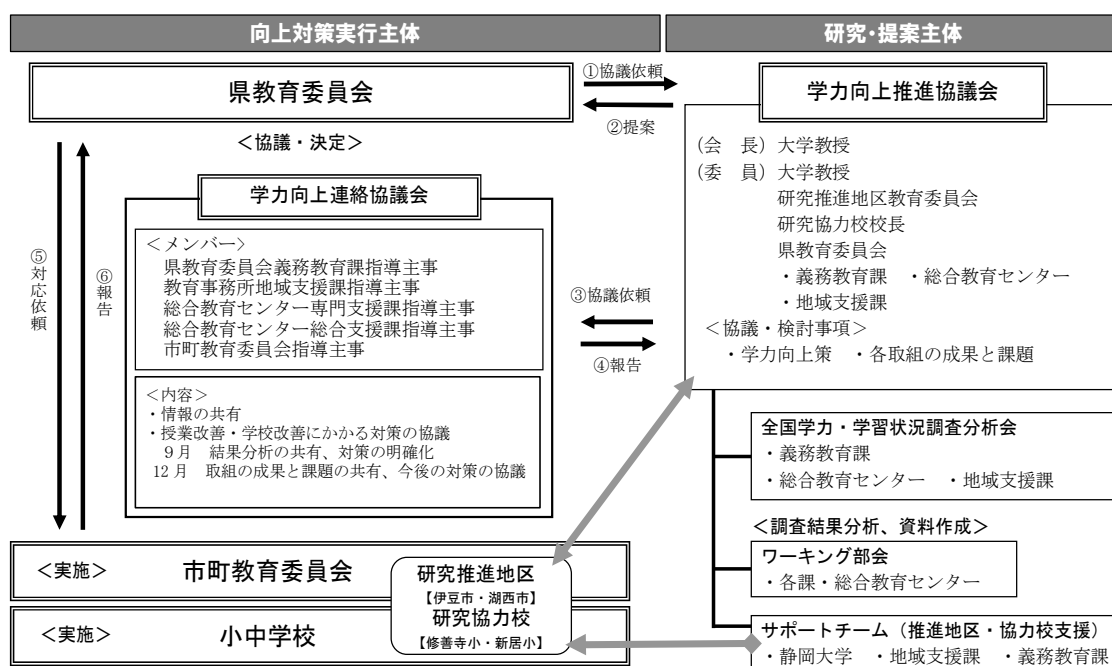
○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

＜学力向上推進プロジェクト事業＞【(1)～(6)】

確かな学力の育成のため、全国学力・学習状況調査結果を受け、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善を支援する環境づくりや推進地区、推進校による実践研究を通じた学力向上の具体策を検討するとともに、更なる改善プランをまとめ、啓発していく。

学力向上推進プロジェクト事業スキーム



(1) 静岡県学力向上推進協議会の設置（年3回）

推進地域、推進地区、協力校の取組や課題を踏まえた上で、重点課題を解決するための手だてを吟味し、推進地域、推進地区の学力向上に関する取組を見直すとともに、協力校における学校改善、授業改善等の取組について協議を行った。

推進地区、協力校へのサポート方法、内容について確認し、全国学力・学習状況調査分析会における分析内容についての助言を行った。

本協議会において協議された内容や全国学力・学習状況調査分析会における分析内容を「学力推進協議会報告書」にまとめ、12月の定例教育委員会において県教育委員会教育長に手交するとともに、県内全市町教育委員会、全小中学校に配布した。

(2) 推進地区、協力校へのサポートチーム派遣

推進地区、協力校の課題解決へ向けて、効果的なサポートができるようにサポートチームを編成し、派遣した。推進地区を所管する教育事務所地域支援課がサポートチームの中心として継続的に支援を行うことにより、推進地区や協力校の実態を把握し、効果的なサポートを行うことができるよう努めた。主に校内研修の進め方、内容に関する指導・助言、研究授業の参観を通して授業改善に向けた指導・助言を行った。

(3) 全国学力・学習状況調査分析会の実施

4・5月…全国学力・学習状況調査問題について分析

5月…「早期対応」（全国学力・学習状況調査実施後、各校が独自に採点・分析等を行い、児童生徒の学力に関する課題を把握し、早期に授業改善、個別指導に生かす取組）データの集計と分析

7月…「チア・アップコンテンツ（教員向け）」（全国学力・学習状況調査の問題や本県の現状と課題について共有し、早期に学校改善、授業改善に生かすための校内研修支援用動画コンテンツ）の作成→県教育委員会Webページへ掲載、市町教育委員会へDVDを配布

8月…全国学力・学習状況調査結果速報分析→学力向上連絡協議会で全市町教育委員会指導主事へ説明

9月…「チア・アップコンテンツ（保護者向け）」（子どもとの関わり方のポイントを示した保護者用動画コンテンツ）の作成→県教育委員会Webページへ掲載、全小中学校へDVDを配布

5～12月…「学力向上推進協議会報告書作成」→全市町教育委員会、全小中学校へ配布

(4) 学力向上連絡協議会の実施（年2回）

推進地区をはじめ、各地区における授業改善、校内研修の充実を図るために、県教育委員会と市町教育委員会の学力担当指導主事等が一堂に会して、県内小中学校の学力や授業改善の現状等について情報を共有するとともに、より有効な学校支援の在り方や学力向上に係る具体的な取組等について協議を行った。全体会と分散会のテーマは、以下の通りである。

<第1回>

- ・講義「平成28年度全国学力・学習状況調査速報分析結果について」
- ・分散会「分析結果と子どもの学びの姿から授業改善を考える」

<第2回>

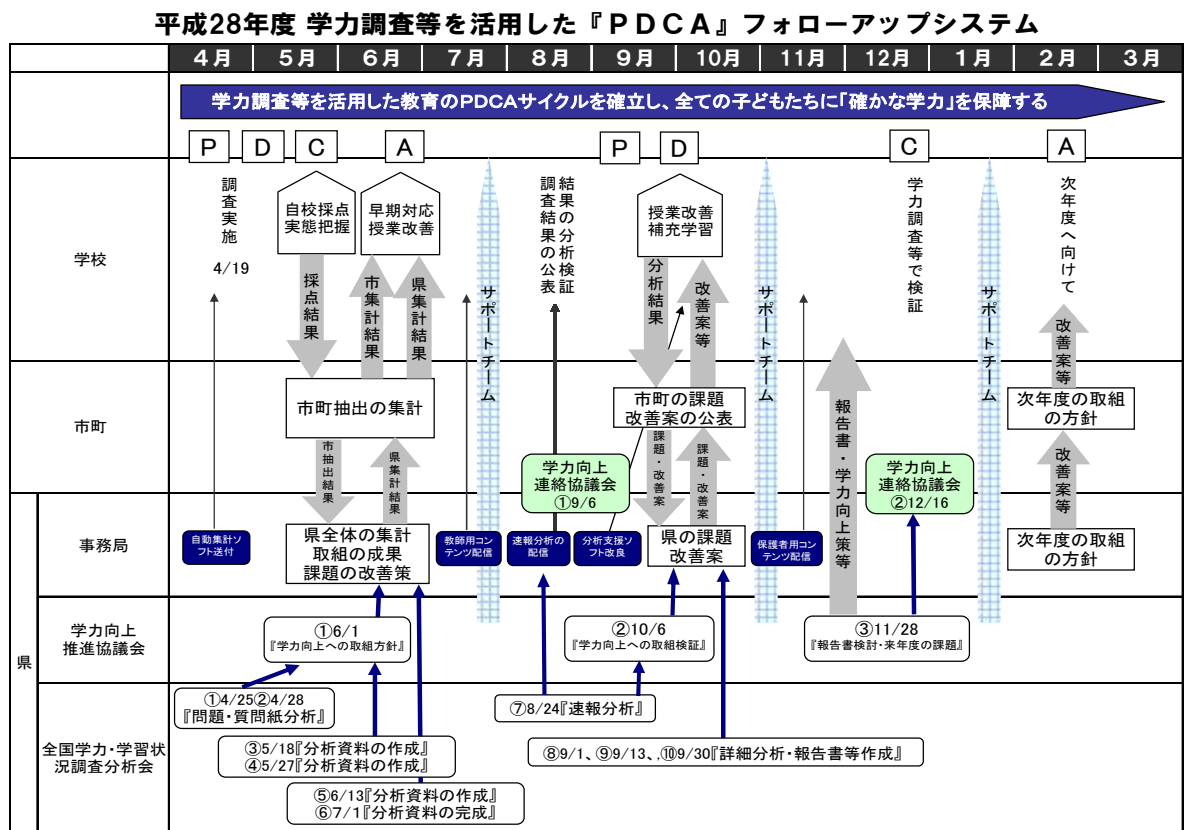
- ・講演「静岡県の子どもの確かな学力の育成に向けて」
- ・分散会「学びの実感を積み重ねる授業を目指して市町でこれから取り組んでいきたいこと」

(5) 全国学力・学習状況調査分析支援ソフトの改善

全国学力・学習状況調査結果から自校及び、個々の児童生徒の学力・学習状況を把握・分析し、学校における児童生徒への教育指導の成果や課題を学校改善や授業改善に生かすことを目的に、文部科学省から送付されるデータに合わせて、自校の調査結果を詳細に分析できるソフトを改善し、各学校で活用できる環境を整えた。

(6) 全国学力・学習状況調査を活用したPDCAフォローアップシステムの構築

調査実施から早期対応による取組を一周目のPDCAサイクルとし、文部科学省の結果公表後の学力向上推進協議会、学力向上連絡協議会等の取組を二周目のPDCAサイクルと捉え、授業改善のポイントの周知を図り、学校現場の学力向上を推進した。



2. 推進地区における取組

(1) 伊豆市の取組

ア 全国学力・学習状況調査、および標準学力調査 (CRT) の活用

全国学力・学習状況調査、標準学力調査について、早期対応による自校採点、伊豆市の調査結果の分析と考察、県の分析支援ソフトの活用等を通して自校の課題を多面的に分析することで、学校改善・授業改善に生かすよう指導した。

イ 伊豆市教育センター各種研修会や市教研の充実

伊豆市教育センターが主催する各種研修会等において、調査結果を踏まえた授業改善の視点について周知した。伊豆市教育センターの研究推進委員会と連携し、指定校による授業研 (年3回) において、授業改善の重点を授業の具体で発信した。

ウ 市内全小中学校への指導主事派遣

全国学力・学習状況調査、および標準学力調査（CRT）の結果を踏まえ、各校における授業改善のためのP D C Aサイクルの土台づくりを推進するべく、担当指導主事が各校を訪問し、指導・助言を行った。協力校の要請に応じて担当指導主事を派遣し、授業改善と校内研修の充実を図った。

エ 伊豆市教育センター教育課程委員会の活用

第1回教育課程委員会（5/16）において、全国学力・学習状況調査の早期対応による結果分析に合わせて「求められている学力」の把握に努めるよう助言した。第2回委員会（12/5）において、全国学力・学習状況調査の結果をもとに、伊豆市における児童生徒の抱える課題について伝達した。

オ 全国学力・学習状況調査結果の公表

全国学力・学習状況調査の結果に基づき、学習活動の充実と学力のさらなる向上を図るため、保護者向け啓発リーフレットを作成し、市内児童生徒の全家庭に配布した。

(2) 湖西市の取組

ア 学力・学習状況・生活習慣について把握し分析する

学力についての現状を把握して分析するために、学力学習状況調査後「湖西市版早期対応」に取り組んだ。また、湖西市学力向上検討会を実施し、各校主幹教諭・教務主任に向けて、静岡県学力向上推進協議会の内容伝達や学力学習状況調査の湖西市全体の分析結果について伝達した。

イ 授業改善に向けての学校支援

市教育委員会の学校訪問時に指導主事が研修主任と面談し、研修推進における状況を随時確認しながら校内研修体制のあり方について助言した。また、研修指導員が市内小中学校を巡回し、授業改善に向けて具体的なサポートをした。

ウ 市内小中学校の連携を深め授業力を高め合う

県教育委員会サポートチームによる協力校（新居小）への支援を依頼した。市教育委員会指導主事と研修指導員においても授業参観を行い、授業のねらいや目標設定等について助言した。

第一回湖西市学力向上検討会において、各校主幹教諭・教務主任を対象に、静岡県学力向上推進協議会および学力向上連絡協議会の内容について伝達をした。第二回湖西市学力向上検討会において、協力校である新居小学校の主幹教諭と研修主任が今年度の研究の成果と課題について報告を行い、授業改善に向けての具体的な方策について情報を発信した。

エ 学力向上の基礎づくりを家庭とともに

「学びの基礎 7つの取り組み」の資料を、各家庭に配布した。学力向上の基盤となる生活習慣の大切さを保護者に伝え、学校と家庭が共通理解をしながら児童生徒の学びを支えていくよう啓発をした。

3. 協力校における取組

(1) 伊豆市立修善寺小学校の取組

ア 学力に関する実態の把握

市で実施している標準学力調査（東京書籍）、全国学力・学習状況調査、全校児童対象の国語・算数の学習に関する調査により、児童の実態を把握した。

イ 「わかる授業」をめざす授業改善

「学習形態を工夫し、かかわり合う場をつくること」「考えを伝える工夫をし、協働的な学びにつなげること」「主体的に問題解決に取り組めるように、発問・支援を工夫すること」を授業改善の視点として一人一研究授業に取り組んだ。授業参観後の研修では、授業改善の視点に沿って、研修主任を中心にワークショップ型で協議を展開し、授業分析図を作成した。

ウ つけたい力を明確にした継続的な取組（基盤となる学力の定着）

かかわり合いを通して学びを深めていくために、本校の児童にとって必要な力を、全職員で洗い出し、年度当初に共通理解を図ったうえで、「話す力・聞く力」「学んだことを身につける力」「学習意欲の向上」の3つの力を育む取組を継続的に行った。

エ 個々の意欲の向上や心の成長を促し、よりよい人間関係を育む取組

子どもたちの心の成長を促し、安心して発言できる学級集団を築いていくことが学びを深めていく基礎であると考え、個々の意欲の向上や心の成長を促し、よりよい人間関係を育む取組を継続的に行った。

(2) 湖西市立新居小学校の取組

ア 学力向上のための授業改善について

研修主題を「自分の考えを伝える力が育つ授業づくり」と押さえ、「目的に応じて自分の考えを整理し分かりやすく伝えられる子」を目指して取り組むことになった。この目指す子供像にせまるために、国語科の授業改善を研修の一番の柱として取り組んだ。

イ 校内研修について

単元デザインシートを一つの共通のツールとして用い、大研究（中心授業）を核に据え、その前後に小研究の授業を組み、学年で連続した授業研究に取り組むようにした。大研究後の全体研修では、大単元を通して児童の学力向上に向けての授業構想について、的を絞った話し合いが行われるようになった。KJ法を用いた話し合いの後に、県のサポートチームの指導主事、湖西市教育委員会指導主事・研修指導員から、本時の授業、単元構想、今後の校内研修への助言をいただいた。

ウ 読書環境の整備

学校司書、保護者が中心の図書ボランティアによる定期的な読み聞かせや各学年の並行読書のための準備、また貸し出し本のバーコード化、移動式ラック、図書室テーブルの新調等を行い、読書環境の整備を進めた。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 伊豆市立修善寺小学校の成果

ア 「わかる授業」をめざす授業改善

国語・算数ともに、授業の内容が分かるという児童の割合が増えている。話し合いながら学ぶと授業が分かりやすいという児童の割合が高い。また、教師も「かかわりあう場面を意図的に設定し、かかわりを通して、学びを深める授業をした」と全員が回答しており、授業改善に手応えを感じて取り組んでいる。

イ つけたい力を明確にした継続的な取組

「聞く力・話す力」について、ほとんどの児童は、しっかり話せて聞けると評価している。保護者と教員の評価も、7月から12月にかけて、話せる子、聞ける子の割合が増えている。これらは、「話す」「聞く」ルールを提示、ステージごと評価をし、指導を継続してきた成果だと考えられる。

「学んだことを身につける力」については、学校評価や静岡県定着度調査の結果から児童が意欲的に漢字や計算に取り組み、力がついてきた。しかし、定着度調査で県平均を下回った二つの学年については、個人差が大きく、個別の支援を充実させる必要がある。

ウ 個々の意欲の向上や心の成長を促し、よりよい人間関係を育む取組

学校評価の結果等から、楽しく学校生活を送っている児童の割合も高く、人間関係や学級集団の雰囲気も良好だと考えられる。子どもたちは、自分なりのめあてをもって学校生活を送り、その中で達成感や満足感を味わい、心を成長させていると考えられる。

(2) 湖西市立新居小学校の成果

ア 授業改善による学力の定着、向上について

静岡県定着度調査の結果から全学年で国語科の学力が向上したとは言い切れないが、昨年度との比較を見ると、少しずつ確実に学力は向上している。また、学校評価の結果から単元全体の授業をどのようにデザインしていくか、単元デザインシートを活用して構想し、授業実践を積み重ねていることで、教師の意識が高まり、児童自身の学びの充実が図られていることが分かる。

イ 校内研修への手応え

校内研修では、前時の様子、今後の予定も含めて単元全体に対しての意見を出し合うことで、全体研修会が非常に活発になった。ここでの話し合いを基に次時以降の授業について微調整が図られ、単元終了後には学年での振り返りを行うPDCAサイクルを進めてきた。また、教師の必要感に応じて県や市の教育委員会にサポートを依頼した。

ウ 読書環境の整備による変化

学校司書、図書ボランティアを中心に、学校図書館の環境が整い、図書室利用者が非常に増えた。図書の貸し出し冊数は、教師の用意した並行読書も行いながらのため特に向上したとは言えないが、読書量全体としては増加している。

2. 実践研究全体の成果

学力向上推進プロジェクト事業を中核に本調査研究を進めたことにより、推進地域、推進地区、協力校の間で、学力向上へ向けた具体的な支援や取組について共通理解を図ることができた。また、それぞれの推進地区を所管する教育事務所地域支援課が中心となりサポートチームとして継続的に支援を行うことにより、推進地区や協力校の実態を把握することができ、効果的なサポートを行うことができた。

推進地区においては、全国学力・学習状況調査結果をこれまで以上に有効活用し、授業改善につなげようとする意識の高まりが見られた。また、協力校が抱える課題に応じた学校訪問が行われ、協力校の研究を手厚く支援する体制が整ってきている。

協力校においては、国が求める学力に対する理解の深まりとともに、客観的なデータに基づいた学力検証サイクルが構築され始めている。また、サポートチームや推進地区の指導主事の支援により、各教員の授業改善への意識の高まりが見られる。

推進地域全体において、全国学力・学習状況調査問題や調査結果、また分析資料、研修用資料等の学校現場における活用が定着してきた。全国学力・学習状況調査を授業改善に生かすという視点も浸透しつつある。市町教育委員会においても、学力調査分析会等を立ち上げ、各市町の実態に応じた方法で、地域住民や保護者、管内の学校へ分析結果を提供するなど、本調査を活用した学校から家庭への「学びの連結」に努めようとする動きが見られる。

3. 取組の成果の普及

(1) 推進地域

全国学力・学習状況調査分析会において、全国学力・学習状況調査の問題や本県の現状と課題について共有し、早期に学校改善、授業改善に生かすための教員用動画コンテンツを作成した。作成した動画コンテンツ（国語編、算数・数学編、質問紙編）を県教育委員会HP上に公開し、夏季休業中の校内研修での活用を各学校に促した。また、全国学力・学習状況調査質問紙調査から明らかになった本県の現状と課題について共有し、学校と家庭の学びの連結を図るための保護者用動画コンテンツを作成した。DVDを全小中学校に配布すると共に県教育委員会HP上に公開し、活用推進に向けた広報を行った。

推進地区と協力校の研究実践については、学力向上連絡協議会において、グループ協議の中で共有する機会を設定した。また、「学力向上推進協議会報告書」に推進地区と協力校の研究実践を掲載し、全市町教育委員会、県内全小中学校に配布した。

(2) 推進地区

ア 伊豆市

伊豆市教育センター教育課程委員会（教務主任対象）や研究推進委員会（研修主任対象）等の各種会合において、調査結果を踏まえた授業改善の視点を周知するとともに、各校の取組状況について情報交換を行った。

全国学力・学習状況調査の結果に基づき、学習活動の充実と学力のさらなる向上を図るため、保護者向け啓発リーフレットを作成し、市内児童生徒の全家庭に配付した。各校に対しては、自校の結果と対策について、ホームページと学校だより等で公表することを依頼した。

来年度は、2年間の研究成果の普及を図るために、11月に研究発表会の実施を予定している。

イ 湖西市

第二回湖西市学力向上検討会において、協力校である新居小学校の主幹教諭と研修主任が今年度の研究の成果と課題について報告を行い、授業改善に向けての具体的な方策について情報を発信した。

「学びの基礎 7つの取り組み」の資料を、各家庭に配布し、学力向上の基盤となる生活習慣の大切さを保護者に伝え、学校と家庭が共通理解をしながら児童生徒の学びを支えていくよう啓発をした。

来年度は、2年間の研究成果普及を図るために、11月に研究発表会を予定している。

○ 今後の課題

学力向上連絡協議会や「学力向上推進協議会報告書」により推進地区、協力校における研究実践が他地区にも広がりを見せつつある。今後も、学力向上推進プロジェクト事業を通して、推進地区、協力校の研究実践を広く県内に発信し、推進地域内で優れた取組を共有できるようにしていきたい。

また、本実践研究で構築した全国学力・学習状況調査を活用したPDCAフォローアップシステムを県、市町、学校レベルそれぞれにおいてスケジュール感を共有し、推進地域全体に定着させたい。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）（中教審第197号）」においては、我が国の子どもたちの課題として、「学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを活用して、生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていくという面から見た学力」が挙げられている。主体的な学びを育むことについては、本県においても経年的な課題となっている。こうした課題をさらに焦点化した上で、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善に取り組めるよう更なる改善プランをまとめ、啓発していく必要がある。

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	静岡県	番号	22
-------	-----	----	----

推進地区名	伊豆市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

読解力の育成をめざす国語科・算数（数学）科の授業改善

〈本研究を通して達成しようとする目標〉

- ・学力定着に課題を抱える学校数を3校以内にする。
- ・国語が好きな児童生徒の割合を増やす。【小学校60%以上、中学校75%以上】
- ・数学が好きな児童生徒の割合を増やす。【小学校75%以上、中学校60%以上】
- ・国語科における「書くこと」「読むこと」の正答率が全国&県平均をクリアする。
- ・小学校算数B、中学校数学Bにおける2極化の解消。

2. 研究課題への取組状況

(1) 全国学力・学習状況調査、および標準学力調査（CRT）の活用

ア 全国学力・学習状況調査について、各校に対して自己採点による結果分析と課題把握を促すとともに、標準学力調査（CRT）の結果、および経年比較による分析をもとに、自校の課題を明確化し、校内研修や授業改善に生かすよう指導した。

イ 全国学力・学習状況調査における伊豆市の調査結果の分析と考察、および授業改善の視点をまとめ、各校に配布した。また、自校の結果分析と考察、および具体的な方策についての報告を依頼し、各校の取組状況の把握に努めた。さらに、県の分析支援ソフトの活用を推奨し、自校の課題を多面的に分析することで、学校改善・授業改善に生かすよう指導した。

(2) 伊豆市教育センター各種研修会や市教研の充実

ア 伊豆市教育センターが主催する各種研修会等において、(1)の調査結果を踏まえた授業改善の視点について周知した。

イ 伊豆市教育センターの研究推進委員会と連携し、指定校による授業研（年3回）において、授業改善の重点を授業の具体で発信した。また、伊豆市教育セ

ンターの夏季研修会では、星槎大学准教授の阿部利彦氏を招聘し、「通常学級における教育のユニバーサルデザイン～授業、教室環境、人的環境のUD～」と題して、特別支援教育の視点に立った授業改善のあり方についての講演会を開催した。

(3) 市内全小中学校への指導主事派遣

ア 全国学力・学習状況調査、および標準学力調査（CRT）の結果を踏まえ、各校における授業改善のためのPDCAサイクルの土台づくりを推進するべく、担当指導主事が各校を訪問し、授業改善と学力向上に向けた取組について指導・助言を行った。

イ 協力校の要請に応じて担当指導主事を派遣し、授業改善と校内研修の充実を図った。 ※ 10/18 地域支援課訪問帯同 11/30 校内授業研（算数）

(4) 伊豆市教育センター教育課程委員会の活用

ア 第1回教育課程委員会（5/16）において、全国学力・学習状況調査の早期対応への積極的なデータ提出を促すとともに、自校採点による結果分析に合わせて「求められている学力」の把握に努めるよう助言した。

イ 第2回委員会（12/5）において、全国学力・学習状況調査の結果をもとに、伊豆市における児童生徒の抱える課題について伝達した。また、各校において、児童生徒の学習状況を正しく把握することにより、指導方法や教育課程の検証・改善に努め、わかる授業や個に応じた指導の充実を図っていくよう指導・助言を行った。

(5) 全国学力・学習状況調査結果の公表

ア 全国学力・学習状況調査の結果に基づき、学習活動の充実と学力のさらなる向上を図るため、保護者向け啓発リーフレット（資料1）を作成し、市内児童生徒の全家庭に配布した。また、本リーフレットは伊豆市のホームページで広く公開し、地域との情報共有を図るようにした。各校に対しては、自校の結果と対策について、ホームページと学校だより等で公表することを依頼した。

イ 保護者向け啓発リーフレットは、市内全保育園・こども園に掲示を依頼し、学校教育に対する理解を図るとともに、就学に向けた意識の啓発を図った。

3. 実践研究の成果の把握・検証

【本市における取組の成果】

(1) 全国学力・学習状況調査の活用について

早期対応に係るデータ提出の呼びかけに対して、小学校5校、中学校4校の協力を得られた。このことから、各校が独自に採点・集計及び分析を行い、早期に自校の実態を把握して授業改善に生かそうとしていることが推察できる。

また、調査モニターとして3年目となる標準学力調査（CRT）の結果と合わせて分析することで各校の課題がより明確になり、研修内容の充実につながった。

結果公表を受けて、全国学力・学習状況調査における伊豆市の調査結果の経年比較による分析と考察、および授業改善の視点をまとめ、9月の校長会を通じて

各校に配布し、本市の課題について共有した。

さらに10月末には、自校の結果分析と考察、および具体的な方策についての報告書（資料2）の提出により、各校の学校改善・授業改善への取組状況を把握することができた。

(2) 伊豆市教育センターによる事業の充実について

伊豆市教育センター教育課程委員会（教務主任対象）や研究推進委員会（研修主任対象）等の各種会合において、調査結果を踏まえた授業改善の視点を周知するとともに、各校の取組状況について情報交換を行った。

また、伊豆市教育センターが主催する授業研究会（6月：土肥中、10月：熊坂小、11月：天城小）において、授業改善の視点を踏まえた授業を公開することで、「わかる授業」「力の付く授業」について問い直す契機となった。

さらに、伊豆市教育センター夏季研修会では、星槎大学准教授の阿部利彦氏を講師に「通常学級における教育のユニバーサルデザイン～授業、教室環境、人的環境のUD～」という演題で講演会を開催した。授業づくりにおけるユニバーサルデザインの意義を明確にしなが、学校（学級）が「学びの場」として当たり前の姿をつくることの大切さについて、御示唆をいただいた。

(3) 市内全小中学校への指導主事派遣について

静岡教育事務所地域支援課による定期訪問に同行し、各校の授業改善に向けた取組状況を把握するとともに、調査結果と学習意欲に関する質問紙調査の結果との関連から、本市の課題について共通理解を図った。

(4) 全国学力・学習状況調査結果の公表について

保護者向け啓発リーフレットを作成し、小中学校の保護者への配布はもちろん、市内保育園・こども園への掲示を依頼したり、市のホームページで広く公開したりすることで、市（学校）・家庭・地域が連携して、子どもの学力向上を図れるようにした。

【平成28年度調査による達成目標の評価】

(5) 「学力定着に課題を抱える学校数を3校以内にする」について

(表1) 学力に課題を抱える学校数

校種別	H27⇒H28
小学校	3⇒0
中学校	2⇒2
小中計	5⇒2

(表2) 学力に課題を抱える教科別学校数(H27⇒H28)

教科	国語A	国語B	算・数A	算・数B
小学校	1⇒0	2⇒1	1⇒1	2⇒2
中学校	2⇒1	2⇒0	1⇒2	2⇒1

表1にあるように、平成28年度調査において、学力定着に課題を抱える学校数は2校と減少している。数字のうえでは、目標をクリアした結果となっているが、校種別に見ると中学校に課題があることは明白である。そのうち1校は、2年連続で課題を抱えており、さらに丁寧に支援を重ねていく必要がある。

また、表2から課題を抱える教科別の学校数を比較してみると、国語は小中学校ともに改善傾向にあるものの、算数・数学においては依然として課題を抱えている

ことがうかがえる。

(6) 「国語が好きな児童生徒の割合を増やす【小60%以上、中75%以上】」について

「国語の勉強は好きですか」という質問について、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、下表のようになっている。

質問紙項目	年度	H27		H28	
	種別	A	B	A	B
国語の勉強は好きですか (小)	伊豆市	50.2		52.6	
	全国比	-10.9		-5.7	
国語の勉強は好きですか (中)	伊豆市	66.9		52.5	
	全国比	+6.4		-7.3	

小学校・中学校ともに、目標値には届いていない。また、前年度の結果と比べると、小学校においてはやや改善傾向にあるものの、中学校は大幅な減少となっている。(5)では、小中学校国語の調査結果が改善傾向にあると述べたが、本項と関連づけて考えると、次年度の中学校の結果については丁寧に分析する必要がある。

しかしながら、小中ともに肯定的に回答した割合は決して高いものではなく、国語科における授業改善は本市の大きな課題であると言える。

(7) 「算数・数学が好きな児童生徒の割合を増やす【小75%以上、中60%以上】」について

「算数・数学の勉強は好きですか」という質問について、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、下表のようになっている。

質問紙項目	年度	H27		H28	
	種別	A	B	A	B
算数の勉強は好きですか (小)	伊豆市	71.1		70.1	
	全国比	+4.5		+4.1	
数学の勉強は好きですか (中)	伊豆市	52.1		54.5	
	全国比	-3.9		-1.5	

国語と同様、小学校・中学校ともに目標値には届いていない。また、前年度の結果と比較してみると、小学校においては大きな改善は見られないものの、全国平均を上回る結果を残している。さらに、中学校でもわずかだが改善の兆しが見られる。(5)において、算数・数学に課題があると述べた。今年度の成果が次年度の結果に反映されることに期待したい。

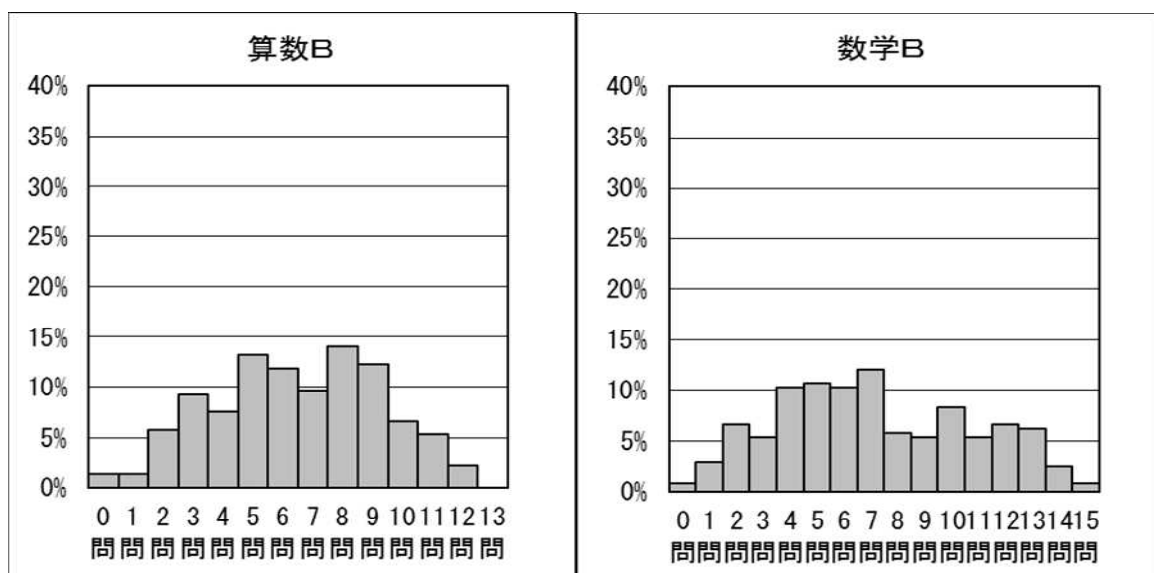
(8) 「国語科における『書くこと』『読むこと』の正答率が全国・県平均をクリアする」について

学習指導要領の領域	年度	H27		H28	
	種別	A	B	A	B
書くこと (小)	伊豆市	83.3	66.0	75.4	57.1
	全国比	-2.7	+4.9	+2.6	+3.7
	県比	-2.7	+2.1	-0.3	+3.2
書くこと (中)	伊豆市	74.3	39.2	76.9	64.2
	全国比	+0.7	+3.1	+3.2	+5.9
	県比	+0.5	-0.7	+1.4	+0.6

学習指導要領の領域	年度	H27		H28	
	種別	A	B	A	B
読むこと（小）	伊豆市	55.0	71.7	76.3	73.7
	全国比	-0.2	+3.6	-2.2	+4.4
	県比	-1.2	+0.9	-2.8	+3.4
読むこと（中）	伊豆市	74.3	86.8	79.9	71.5
	全国比	+0.7	+0.7	+1.3	+5.0
	県比	+0.5	-1.0	-0.5	+1.6

小中学校の国語A・Bともに「書くこと」については改善傾向にあり、良好な結果を残している。反面、国語Aの「読むこと」については、小学校・中学校ともに改善の余地がある。特に、小学校国語Aにおいては、前年度の比較から全国・県との差はさらに大きくなっており、今年度の取組の成果が期待される。

(9) 「小学校算数B、中学校数学Bにおける2極化の解消」について



小学校算数Bと中学校数学Bの度数分布グラフを見ると、どちらも2極化の傾向にあることは明らかである。しかしながら、(7)に記したように、小中学校を通じて算数・数学に対する関心が改善傾向にあることを考えると、次年度の結果にも反映されるものと思われる。

4. 今後の課題

平成28年度の子童生徒質問紙調査から、学習意欲に関する質問の回答内容を分析してみる。(資料3)

小学校国語では、すべての質問で全国を下回っている。約半数の子どもが「国語が好きではない」と回答しているにもかかわらず、調査結果は良好であるという状況は看過できない問題である。さらに、多くの子どもが「国語の勉強は大切だ」「国語で学習した内容は、社会に出たときに役に立つ」と考えているにもかかわらず、およそ4分の1の子童が「授業がわからない」と回答している。さらに、中学校国語では、質問②④において全国を上回っているものの、小学校と同様の状況が読み

取れる。つまり、本市においては、国語の授業づくりに課題があることは明白である。児童生徒の興味関心を引き出し、主体的な学びを促すような授業を実践していく必要がある。

次に、算数・数学について言及する。小学校算数については、質問④で全国をわずかに下回っているものの、どの質問もおおむね良好な結果を残している。児童の3割が「算数の勉強は好きではない」と回答しているが、約9割が「よく分かる」と回答している。「わかる授業」「力の付く授業」が実現できていると考えてよいだろう。一方、中学校数学では、質問①③において、全国を下回る結果となっている。国語と同様、半数近い子どもが「数学が好きではない」と回答しているのに、良好な調査結果を残している。さらに、小学校と比較して「数学の授業が分かる」と回答している子どもの割合が減少していることを考えると、学習内容が難しくなったことによる苦手意識が生じていることが考えられる。また、「算数・数学は将来の役に立つ」と回答する子どもの割合が、10ポイント以上減少していることから、「苦手」が「あきらめ」につながらないように授業の質をさらに高めていく必要があるだろう。

それでは、授業づくりの課題はどこにあるのか。校種別に分析してみる。

中学校では、質問「1、2年生のときに受けた授業の中で目標（めあて・ねらい）が示されていたと思いますか」において、肯定的な回答の割合（76.5%）が全国に比べると低い結果となっている。学校質問紙では、すべての中学校が「計画的に取り入れた」と回答しており、生徒の思いと開きがあることがわかる。学習目標を意識することは、学習内容の定着につながる。目標を明確にした授業の重要性について、再度確認したい。

小学校では、質問「5年までに受けた授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか」において、肯定的に回答した児童の割合は32.0%という結果であった。昨年度（24.0%）に比べるとやや改善傾向にはあるが、相変わらず全国を下回っている。児童が学びのよさや身に付けた力を実感しながら確かな学力を育てていくためにも、振り返りの時間の確保に努めていく必要がある。

以上のことから、本市における次年度の重点となる取組を次に示す。

- ①教職員の授業力向上を目標に、伊豆市共通の研究テーマを設定することで、各校における研修を充実させ、指導方法や具体的な手立てを共有する。
- ②授業における目標（学習の見通し）と振り返りの活動を重視し、児童生徒主体の学びを保障する。

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	静岡	番号	22
-------	----	----	----

推進地区名	湖西市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1 研究課題

- ・ 子供が興味・関心を持ち、主体的に学ぶ単元構想と授業づくり
- ・ 知識や情報を活用しながら、考えをまとめ、表現することができる力の育成と教科横断的な視点を大切にされた教育活動

2 研究課題への取組状況

(1) 学力・学習状況・生活習慣について把握し分析する

学力についての現状を把握して分析するために、学力学習状況調査後「湖西市版早期対応」に取り組んだ。昨年度から明らかになった課題と改善策を今年度の結果と照らし合わせ、さらに具体的方策を考えて授業改善に生かした。そして「結果速報版」「結果詳細版」を作成し、課題の分析結果をHP掲載や便りを通じて家庭・地域に知らせ、家庭学習への関心を深めた。

また、湖西市学力向上検討会を実施し、各校主幹教諭・教務主任に向けて、静岡県学力向上推進協議会の内容伝達や学力学習状況調査の湖西市全体の分析結果について伝達した。

(2) 授業改善に向けての学校支援

市教育委員会の学校訪問時に指導主事が研修主任と面談し、研修推進における状況を随時確認しながら校内研修体制のあり方について助言した。また、研修指導員が市内小中学校を巡回し、各学校からの要請に応じて授業づくり・指導案検討等について、相談に応じながら当事者とともに考え、授業改善に向けて具体的なサポートをした。

(3) 市内小中学校の連携を深め授業力を高め合う

ア 協力校(新居小)への支援

県教育委員会サポートチーム派遣として、静西教育事務所の指導主事による指導を依頼した。協力校での研究授業を参観し、その授業で付けたい力と単元構想の相関性を視点とした授業づくりへの指導・助言をいただいた。資質・能力の育成についても御指導いただき、次年度の教科横断的な視点を大切にした授業の構想にもつながった。

市教育委員会指導主事と研修指導員においても授業参観を行い、授業のねらいや目標設定等について助言した。また、次年度の教育課程編成研修のなかで学力支援についての部会に出席し、研修の方向性を検討、協議した。

イ 湖西市学力向上検討会

- ・ 第一回・・・各校主幹教諭・教務主任を対象に、静岡県学力向上推進協議会および学力向上連絡協議会の内容について伝達をした。また、市内小中学校の学力における課題を中心に分析し、授業改善の必要性について説明した。
- ・ 第二回・・・静西教育事務所の指導主事を招聘し、学校訪問により把握した校内研修の実態や授業改善に向けての講話を依頼した。また、各研修主任が自校の授業研究を振り返り、演習を通して成果と課題を明らかにした。会の中で、協力校である新居小学校の主幹教諭と研修主任が今年度の研究の成果と課題について報告を行い、授業改善に向けての具体的な方策について情報を発信した。

(4) 学力向上の基礎づくりを家庭とともに

「学びの基礎 7つの取り組み」の資料を、各家庭に配布。学力向上の基盤となる生活習慣の大切さを保護者に伝え、学校と家庭が共通理解をしながら児童生徒の学びを支えていくよう啓発をした。

The materials include seven challenge cards and a larger poster. The challenge cards are:

- Challenge 1: ことばを使って思いを伝えましょう** (Use words to express thoughts). Focuses on communication skills.
- Challenge 2: 体を動かして体力をつけましょう** (Move your body to build strength). Focuses on physical activity.
- Challenge 3: 進んであいさつをしましょう** (Walk and greet). Focuses on social skills and walking.
- Challenge 4: 友だちといろいろなことにチャレンジしましょう** (Challenge with friends in various things). Focuses on social interaction and trying new things.
- Challenge 5: 早寝早起きの習慣をつけましょう** (Develop a habit of going to bed early and waking up early). Focuses on sleep habits.
- Challenge 6: 朝ごはんをしっかりと食べましょう** (Eat breakfast properly). Focuses on eating habits.
- Challenge 7: テレビやゲームの使用は、ルールを守りましょう** (When using TV or games, follow the rules). Focuses on screen time management.

The poster on the right, '学びの基礎「7つの取り組み」小学生版', features the title '愛情と思いやりあふれる家庭づくり' and a checklist of 10 points for parents to check on their children's behavior and learning habits.

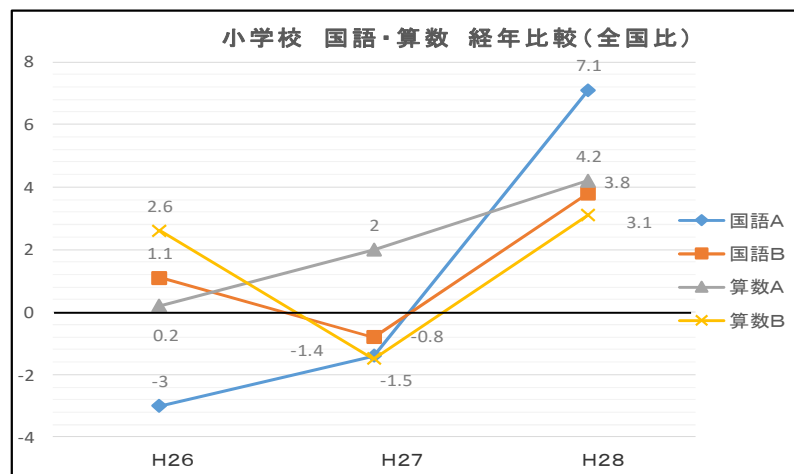
3 実践研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力学習状況調査の結果

ア 設問別調査結果より

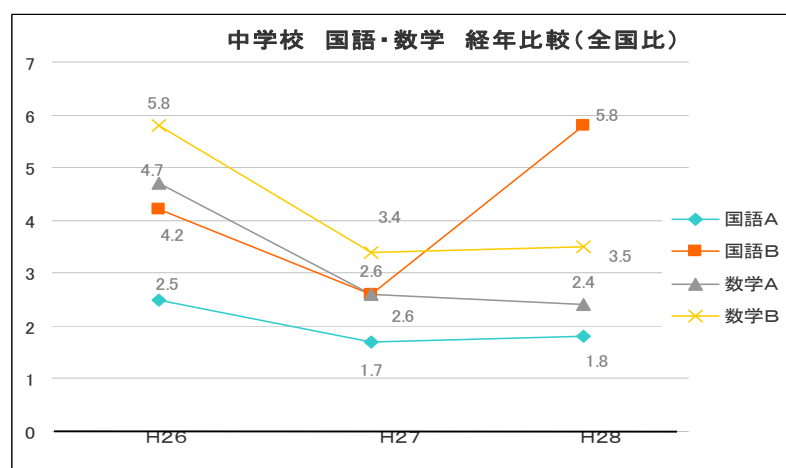
小学校においては、平成 27 年度は、(グラフ 1)にあるように、算数A以外は平均正答率が全国平均を下回っていた。ところが、平成 28 年度は全体的に改善傾向が見られ、国語A・B、算数A・Bともに全国平均を上回った。特に国語Aの伸び率が顕著であった。

(グラフ 1)



中学校においては、(グラフ 2)のとおり、平成 26 年度から平成 28 年度まで、国語A・B、数学A・Bともに全国平均を上回った。また、平成 27 年度と平成 28 年度については、国語B以外ほぼ同じ結果であった。

(グラフ 2)



イ 活用に関する問題

小学校・中学校学習指導要領（国語）の領域における「活用力」に関連する問題の平均正答率より

※領域のなかで傾向が類似している問題に特化し、比較した。（平均正答率 %）

学習指導要領の領域		H 2 7		H 2 8	
小学校	書くこと	全国	41.8	全国	64.2
	(1) エ「引用したり図表やグラフなどを用いたりして自分の考えが伝わるように書くこと」に関する問題	湖西市	40.0	湖西市	65.6
		比較	-1.8	比較	+1.4
中学校	書くこと	全国	23.3	全国	57.7
	(1) ウ「事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように説明や具体例を加えたり描写を工夫したりして書くこと」に関する問題	湖西市	28.3	湖西市	67.5
		比較	+5.0	比較	+9.8

昨年度と比較をすると中学校では、「活用しながら書く」力が着実に付いてきており、小学校においてもわずかにではあるが、伸びを示している。それに伴い、各校から前年度から今年度にかけての早期対応策が挙げられた。「活用力」を付けるための授業改善の手だてを、以下にまとめた。

- ・資料や問題文を読み取る力を付けることは非常に大切である。長文をきちんと読むことと、問題を適切に捉えることとを関連付けて取り組んでいく。
- ・二次的、三次的な資料の読み取りが難しいため、読書の機会を確保し、語彙を増やしていく。
- ・自分の考えを順序立ててノートに書いたり説明したりする活動や、友達の考えと自分の考えを比べ、その違いを見付ける活動を積み上げていく。
- ・意見と根拠を区別して書く活動を取り入れる。
- ・条件付き作文を書く機会を増やし、条件の中で自分の意見をまとめる力を付ける。
- ・国語以外の教科でも、条件に即して文章を書く活動を継続して取り入れていく。
- ・答えを導くまでに至る過程を、説明できるようにする。

(2) 湖西市学力向上検討会（第2回）より

市内小中学校の授業づくりの課題としては、県サポートチームからの指導・助言にあったとおり、教師の思いが先に立ち、教師が主体の授業展開になっていた

ことや、小集団での伝え合いが念頭にあり、個が考えを持たない、必要性を確認しないままに交流を行っていたことなどが挙げられる。しかし、平成27年度から研修主任研修会で静西教育事務所の管理主事、指導主事より授業改善推進のための御指導・御助言をいただいたり、子供の主体性を先進的に研究している他市の実践を紹介していただいたりする中で、徐々にではあるが、「授業の中心は子供」「子供の思いや考えを大切にする授業展開」ということを意識する実践が増えつつある。湖西市学力向上検討会の中では、市内小中学校の研修主任から、主体性を育むための成果につながった授業実践として、以下のような内容の報告があった。

<小学校>

- ・子供たちに「考えたい」「やってみたい」という必要感を持たせた。
- ・教師が指示するだけでなく、子供が自己決定する場面を意図的に取り入れた。
- ・粘り強く自力解決しようとしている姿を認めた。課題を解決する力には個人差がある。一人一人の表れを想定して対応できるように心掛けた。
- ・付けたい力の共有化を図ることで、子供たちが見通しを持って学習する単元づくりを行うことができた。

<中学校>

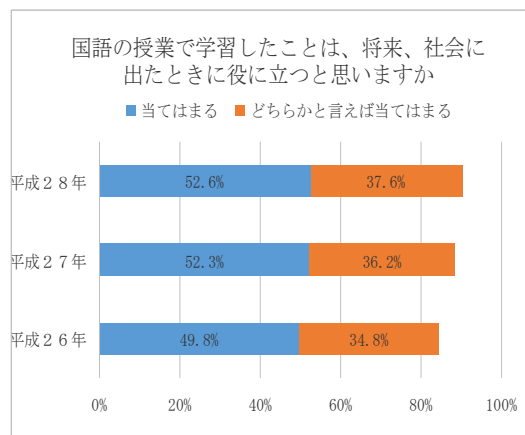
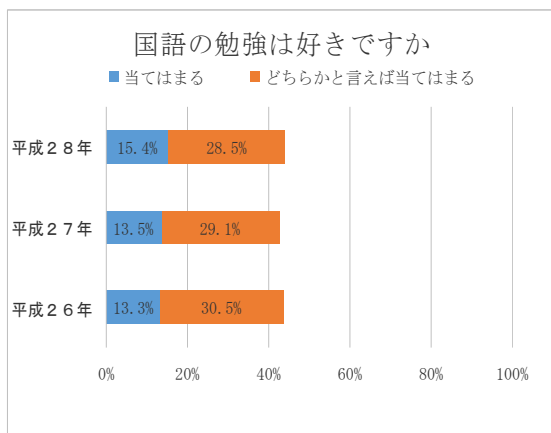
- ・学習課題を明確にすることで、生徒は積極的に思考することができた。
- ・導入の工夫により生徒の発言、つぶやきが多くなった。
- ・考えるための時間の確保と、教師の的確な支援に努めた。
- ・基礎学力を付けることが自己肯定感や自信につながり、新しい課題に取り組む力となった。
- ・「話し合いによって課題解決ができた」という達成感を味わわせる。その経験を積み重ねることができるよう授業を展開した。
- ・表出物などの具体的なモデルやゴールを教師が示すと、学習のイメージがわき、生徒の意欲が高まった。

4 今後の課題

研究協力校である新居小学校においては、校内研修における子供の姿として、「国語の授業を楽しみにしている」「書くことへの抵抗感が減った」「学習に見通しをもって取り組んでいる」等の成果が得られている。また、教職員へのアンケートによると、自分の授業や指導について、「付けたい力に合う効果的な言語活動を意識することができた」「児童の変容や、力の付き具合が把握できるようになった」「教師の指導する場面だけでなく、主体的な学びや対話の場面を意識して授業を組み立てることができるようになった」等の評価が挙げられている。

しかし、湖西市全体で見ると、特に小学校においては多少の意識の変化はあるものの、依然として「国語の勉強は好きですか」という質問に対しては43.9%の

子供が肯定的な回答をするに留まっている。「国語の授業で学習したことは将来社会に出たときに役に立つ」と答えた子供が平成28年度は90.2%であることと比べても、「国語学習の大切さはわかっているが、好きではない」と考えている実態が浮き彫りとなっている。



次年度は、協力校の実践を継続して発信していくことで、市内の各小中学校の研修の充実につなげたい。また、「湖西市学力学習研究課題」の周知と校内研修における授業改善の支援体制を強化し、引き続き湖西市の子供たちが「主体的に学ぶ授業づくり」と子供たちの「知識や情報を活用しながら考えをまとめ、表現することができる力」を育てていきたい。

教科横断的な視点を大切にした教育活動については、試行を繰り返しながら次年度の研究で取り組みたいと考えている。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	静岡県	番号	22
-------	-----	----	----

協力校名	静岡県伊豆市立修善寺小学校
------	---------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

28年度初め、本研究協力校の指定を受け、まずは、前年度の全国学力・学習状況調査の結果をもとに、本校の児童の実態を探った。

学力調査より(H27)

〈表1〉

教科	A(主として知識)	B(主として活用)
国語	69.6%(全国平均-0.4)	70.4%(全国平均+5.0)
算数	74.7%(全国平均-0.5)	36.5%(全国平均-8.5)

質問紙より(H27)

〈表2〉

教科	勉強は好きですか	授業の内容はよく分かりますか
国語	58.3%(全国平均-2.8)	75.0%(全国平均-7.0)
算数	66.7%(全国平均+0.1)	70.8%(全国平均-10.2)

*数値は「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」の合計

上記の結果では、国語Bを除いて全国平均を下回っている。特に算数Bは大きく下回っていて、活用力の低さがうかがえた。これらは、質問紙の結果からもわかるように、国語や算数への興味関心の低さとともに、授業内容が十分に理解されていないことが考えられた。

さらに、伊豆市で実施している標準学力調査(東京書籍)の結果を見てみると、全国平均をやや下回る学年が多く、決して数値的には高いとは言えない現状にある。ただ、26年度から28年度の経年変化では、学年や教科でばらつきはあるものの、総じて全国平均を50とした標準スコアが上昇している。これは、教員の地道な取り組みと授業改善の成果ではないかと考えられる。

このようなことから、本校の学力に関する課題は、「知識や技能、聞く話すといった学習の基本となる部分の一層の定着を図ること」「思考力、判断力、表現力等の向上を図ること」「自ら課題を解決しようとする学習意欲を高め、進んで考えを表現し合い、相互理解できる力をつけること」等が考えられる。

そこで、これらの課題に対して、教師は、「わかる授業」をめざし、授業改善をすすめるとともに、つけたい力を明確にした継続的な取組をしていくことが重要であると考えた。

2. 協力校としての取組状況

(1) 学力に関する実態の把握

①市で実施の標準学力調査（東京書籍）より（28年4月実施 6月分析） *平均正答率〈表3〉

学年／教科	国 語	算 数
1 年	実施せず	実施せず
2 年	83.5%（全国平均－1.6）	84.3%（全国平均－2.4）
3 年	70.2%（全国平均－4.3）	65.7%（全国平均－6.7）
4 年	83.3%（全国平均＋10.2）	77.8%（全国平均＋1.9）
5 年	71.6%（全国平均＋0.2）	66.5%（全国平均－1.8）
6 年	72.1%（全国平均－1.8）	70.2%（全国平均＋0.1）

極端に低い正答率の学年はないが、全国平均を下回る学年が多い。国語の観点別では、「読む能力」と「知識・理解・技能」が、算数では、「数学的な思考」と「知識・理解」が劣っている傾向にあった。また、極端な二極化はないが、下位の子の割合が多く、底上げの必要性が感じられた。【資料1】

②全国学力学習状況調査より（28年4月実施、8月分析）

学力調査より（H28）

〈表4〉

教 科	A（主として知識）	B（主として活用）
国 語	73.3%（全国平均＋1.4）	63.6%（全国平均＋5.8）
算 数	81.7%（全国平均＋4.1）	47.0%（全国平均－0.2）

質問紙より（H28）

〈表5〉

教 科	勉強は好きですか	授業の内容はよく分かりますか
国 語	53.6%（全国平均－4.7）	71.4%（全国平均－ 9.3）
算 数	82.2%（全国平均＋16.2）	92.8%（全国平均＋12.6）

*数値は「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」の合計

算数B（活用）に関しては、全国平均をやや下回ったが、平均正答率は、すべてにおいて昨年度を上回っている。特に算数は大幅に上がった。これは、質問紙から分かるように、算数が好きで、授業がわかる子の割合が増えたことが要因として考えられ、改めて授業改善の大切さを実感した。国語に関しては、あまり好きではなく、授業もよく分かるわけではないが、テストはできるという結果であった。

また、質問紙の「国語や算数の勉強が大切だと思うか。」や「将来、社会に出たときに役立つと思うか。」という問いに対する回答が、全国平均を下回っていて、学習の意義や生活や社会との関わりについての関心の低さがうかがわれた。

③全校児童対象の国語・算数の学習に関する調査より（28年7月、29年1月 実施）

国語・算数の学習に対する児童の意識と自己肯定感について、下記の項目で年に2回調査し、授業改善に役立てようと考えた。 *数値は「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」の合計〈表6〉

	勉強は好きですか		授業の内容はよく分かりますか		自分によいところがあると思いますか	
	7月	1月	7月	1月	7月	1月
国語	68.3%	62.9%	89.5%	92.4%	82.0%	78.3%
算数	83.5%	81.8%	93.2%	96.2%		

(2) 「わかる授業」をめざす授業改善

①一人一研究授業

どの児童にもわかる授業、思考力・判断力・表現力等が高まる授業を実践することが、学力の向上にもつながると考え、本校では、自分の考えを進んで表現し、友だちと関わり合いながら、問題を解決していく授業をめざし、授業改善をすすめている。学調の質問紙では、本校の児童は、下記のように、自分の考えを他の人に伝えたり、分からないことを友だちに聞いたりすることは苦手ではないが、話し合いを通して自分の学びが深まったとは感じていないようである。

〈表7〉

質問内容	平成27年度	平成28年度
自分の考えを他人に説明したり、文章に書いたりするのは難しいと思うか	50.0% (全国均-5.2)	46.5% (全国平均-8.3)
友だちと話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広めたりすることができていると思うか	66.7% (全国平均-0.2)	60.8% (全国平均-7.5)
授業の中で分からないことがあったらどうするか。友だちに尋ねる	45.8% (全国平均+15.0)	35.7% (全国均+4.0)

*数値は「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」の合計

そこで、「学習形態を工夫し、かかわり合う場をつくること」「考えを伝える工夫をし、協働的な学びにつなげること」「主体的に問題解決に取り組めるように、発問・支援を工夫すること」を授業改善の視点として研究授業に取り組み、かかわりを通して学びが深められる児童を育もうと考えた。【資料2】

○今年度の研究授業

- ・ 6 / 8 6年算数
- ・ 6 / 12 2年国語
- ・ 9 / 7 4年学活
- ・ 11 / 30 3年算数
- ・ 6 / 15 全学年算数
- ・ 7 / 6 5年算数
- ・ 10 / 18 4年算数
- ・ 2 / 15 1年算数



②校内研修における授業研究の工夫

共通理解の上で、全職員で研修に臨むことが、個々の授業力を向上させ、児童の学力向上につながると考えている。そこで、指導案は、学年団と全体、2回の検討を経て作成している。授業参観の際は、研修の視点にそって付箋にメモを書き授業分析に生かしている。事後研修では、授業の視点にそって、研修主任を中心にワークショップ型で協議を展開し、授業分析図にまとめていった。分析図は掲示し、授業改善を積み重ねた。



③外部講師の招聘

本校の研修の方向性や授業に対して指導助言をいただき、研修を深めようと考え、今年度は2人の講師を招聘した。



6 / 15	<p>裕元新一郎 静岡大学教授を招き、全学級算数の授業を公開し、指導助言をいただくとともに、「算数科における基盤学力と育てたい力について」と題した講演をしていただいた。</p>
7 / 6 11 / 30 2 / 15	<p>清大輔 静東教育事務所地域支援課指導主事を招き、中心授業を公開。事後研究にも参加していただき、指導助言をいただいた。</p>

(3) つけたい力を明確にした継続的な取組（基盤となる学力の定着）

かかわり合いを通して学びを深めていくために、本校の児童にとって必要な力を、全職員で洗い出し、年度当初に共通理解を図った。いろいろな課題が出されたものをまとめると、「話す力・聞く力」「学んだことを身につける力」「学習意欲の向上」の3つの力となった。これらの力の向上をめざして、以下の取組を継続している。

- ①朝学（15分）・ドリルタイム（水曜の昼）・フォローアップタイム（放課後）の時間に、繰り返し学ぶことで既習事項の定着を図ったり、個別指導にあたりたりした。また、活用問題に取り組むなど内容を工夫し、思考力の向上につなげた。
- ②修善寺地区4小学校共通の習熟度テスト「はかせテスト」を年間3回実施。小中連携して基礎学力の定着を図っている。（6/15 11/15 2/15）【資料3】
- ③辞書引き学習（一人一冊、国語辞典を持ち、言葉の意味を調べ、調べた言葉には付箋を貼る。）や読書活動を充実（必読書完読賞など）させ、語彙を増やす取組をすすめた。【資料4】
- ④学年にあった「話す」「聞く」ルールを提示し、指導・評価を継続していった。【資料5】
- ⑤「家庭学習のすすめ」や「自ら学ぶ子へ」を各家庭に配布し、家庭学習の習慣化を図るとともに、学校便り等で、学力向上への取組を啓発し、家庭と連携して推進を図った。【資料6】

(4) 個々の意欲の向上や心の成長を促し、よりよい人間関係を育む取組

子どもたちが学校を楽しみに通い、意欲的に学習に取り組める、そんな環境が、学力の向上には大切ではないだろうか。ただ、本校の児童は、自己肯定感が低く、難しいことに挑戦してやり遂げる気持ちもけっして強くはない。そんな子どもたちの心の成長を促し、安心して発言できる学級集団を築いていくことが学びを深めていく基礎であると考え、以下の取組を継続している。

- ①年2回のQ Uテストを実施し、学級集団の分析・改善を図った。【資料7】
(実施：5/16・10/7 分析：6/22・11/9)
- ②特別活動教科リーダーの先生の研究授業を通して、子どもが主体となる学級会のすすめ方を学び、各学級での話し合い活動に生かしていった。（9/7 4年生）
- ③年2回の「学習の約束を守ろう」強化週間を設け、学習規律の定着を図った。【資料8】
(9/14～10/7 1/10～1/27)
- ④「だるまっこフェスティバル」や「リレー会」等の学校行事、体力アップコンテストへの挑戦などでは、学級のめあてに向かって主体的に取り組む場面を意図的に設定し、その姿を支援し、充実感が味わえるようにした。
- ⑤ステージごとに目標を立て、振り返りをした。また、遠足や運動会、持久走大会などの行事、「かがやきコンサート」（自由参加型）には、自分なりのめあてをもって主体的に臨むことができるよう支援し、意欲の向上を図った。【資料10 ②】
- ⑥集団登校、縦割り清掃、縦割り遊びなど、縦のつながりを大切にした取組を継続している。
- ⑦「挨拶運動」（計画委員会・保護者）や「心が元気になる言葉辞典」（保健委員会）の活動、学校保健委員会での「心の健康」をテーマにした学習を通して、あたたかな人間関係を築くためのスキルや心を育んだ。【資料9】
- ⑧地域から学んだり、地域の方から学んだりする活動を通して、地域に誇りもち、自信がもてるようにしている。【資料10 ①】



保護者と児童が一緒にあいさつ運動に取り組んだ

3. 取組の成果の把握・検証

今年度の取組の成果を洗い出し、検証していくために、学校評価や児童の活動の様子、県の定着度調査などを分析した。

(1) 「わかる授業」をめざす授業改善では

前記の〈表6〉から、国語・算数ともに、授業の内容が分かるという児童の割合が増えている。学校評価からも、下表のように

質 問 内 容	7 月	1 2 月
(児童) 友だちと話し合いながら学び合うと、授業が分かりやすい。	97%	98%
(教師) かかり合う場面を意図的に設定し、かかりを通して、学びを深める授業をした。	100%	100%

*数値は「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の合計

話し合いながら学ぶと、授業が分かりやすいという児童の割合は高く、12月にかけて微増している。また、教師も全員が足並みを揃えて授業改善に取り組んでいることがうかがえる。100%のうち「そう思う」と自信をもって回答した教師の割合も、29%から50%に増えている。授業改善に手応えを感じて取り組んでいるようである。さらには、清指導主事から、2月の授業研究の際、課題を共有し意欲的に取り組む姿や、かかり合いながら堂々と話す姿など、この1年の児童の変容を評価していただいた。このようなことから、今年度の取組の成果があらわれたのではないかと考える。

【資料11】

(2) つけたい力を明確にした継続的な取組では

①聞く力・話す力について

*数値は「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の合計

〈表9〉

子どもは、相手(友だちや先生)に伝わるように話しているか。	7 月	1 2 月	子どもは、友だちや先生の話を聞いているか。	7 月	1 2 月
児 童	94%	93%	児 童	98%	98%
保 護 者	78%	86%	保 護 者	81%	86%
教 員	63%	86%	教 員	75%	85%

上記の学校評価を見ると、ほとんどの児童は、しっかり話せて聞けると評価している。保護者と教員の評価も、7月から12月にかけて、話せる子聞ける子の割合が増えている。これらは、「話す」「聞く」ルールを提示、ステージごと評価をし、指導を継続してきた成果だと考えられる。また、辞書引き学習や読書活動の推進を通して、言葉に関心をもち、語彙が増えてきたことも効果があったのではないだろうか。



意欲的の調べ、ほとんど児童が付箋を100枚以上貼っている。

②学んだことを身に付ける力について

〇はかせテスト第3回結果(11/15 修善寺地区4小学校共通習熟度テスト)平均正答率〈表10〉

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
漢字	96.2%	84.8%	72.3%	92.6%	90.2%	90.2%
計算	98.8%	98.1%	94.2%	88.3%	89.2%	92.6%

○2学期学校評価より (*数値は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計)

- ・宿題をしっかりとやっている。(児童100% 保護者73%)
- ・漢字を書く力や読む力が付いてきている。(保護者93%)
- ・計算する力が付いてきている。(保護者96%)

○静岡県定着度調査結果 (H29. 1. 12)

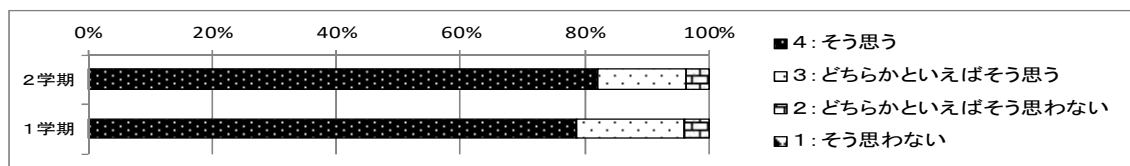
平均正答率 (表11)

学年/教科	国 語	算 数
1 年	90.1% (県平均+10.1)	98.2% (県平均+7.0)
2 年	82.3% (県平均-2.0)	89.4% (県平均-3.2)
3 年	74.8% (県平均-5.6)	83.5% (県平均-3.1)
4 年	78.3% (県平均+5.6)	83.1% (県平均+5.0)
5 年	75.5% (県平均+7.2)	86.6% (県平均+6.1)
6 年	78.9% (県平均+4.0)	88.6% (県平均+4.9)

児童が漢字や計算に目標をもって意欲的に取り組んでいることが、はかせテストの結果や宿題への取組からもうかがえる。学校評価では、保護者も力が付いてきたと感じているようである。定着度調査の結果を見ると、4つの学年では大きく県平均を上回り、学んだことが定着していることがわかる。県平均を下回った2つの学年については、個人差が大きく、下位の子どもの割合が高い。今後、個別の支援を充実させていきたい。

(3) 個々の意欲の向上や心の成長を促し、よりよい人間関係を育む取組では

○学校評価「あなたは、楽しく学校生活を送ることができている。」



○だるまっこフェスティバル (学校行事) 感想より (抜粋)

(児 童) 計画や準備を1ヶ月ぐらいいみんなでがんばってきました。そのおかげで5年生のお店に人がたくさん来たので、大成功でした。

(保護者) だるまっこフェスティバルは、子どもたちの自主性を生かした活動だと思いました。1人1人責任をもって行動している姿に成長を感じました。

子どもたちは、自分なりのめあてをもって学校生活を送り、その中で達成感や満足感を味わい、心を成長させている。楽しく学校生活を送っている児童の割合も高く、人間関係や学級集団の雰囲気も良好だと考えられる。よりよい学習環境を整えていくことが、学力の向上にもつながるのではないだろうか。

4. 今後の課題

〈表6〉から、授業の内容が「わかる」と回答する児童の割合が多く、増えていることは成果の一つだと思う。ただ、国語や算数が好きという児童の割合や、自己肯定感については下がっている。これは、子どもたちは授業の内容が分かっている、「できる」という自信には至っていないのではないかと考えられる。「わかる」が「できる」になり、できるが「好き」につながり、好きになれば「意欲や主体性」が高まり、学力もさらに向上するのではないだろうか。子どもたちが「できる」という自信がもてるよう、今後も、基盤となる学力を育む取組を継続するとともに、わかる授業をめざした授業改善を中心に、学びの実感を積み重ねていきたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	静岡県	番号	22
-------	-----	----	----

協力校名	静岡県湖西市立新居小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1 当初の課題

(1) 児童の学力について

本校の平成27年度の全国学力学習状況調査の結果では、国語、算数、理科ともに正答率分布の二極化は見られないが、県や国と比較すると全体が低い方に分布しており、平均正答率も下回った（注1）。また、A・B問題とも記述式問題で誤答や無解答の割合が多かった。

これは、問題文や資料を読み解く力や、複数の文章や資料を関連付ける力に課題があることを示している。さらに、教師の見立てを合わせると、本校児童は前述の課題に加え、説明や表現するための語彙の少なさも要因となり、自分の考えをまとめたり、目的や意図に応じて表現（説明）したりすることに課題が見られた。これは、国語科、算数科にとどまらず、他の教科、領域においても見られる傾向である。

児童質問紙の結果からは、国語科の学習が嫌いな児童の割合や、読書があまり好きではない児童の割合が多いことも明らかになった。（注2）。

これらの本校児童の課題点を教師の指導の課題点と捉え、国語科の授業改善（1年目）と、国語科を核とした教科横断的な視点をもった授業づくり（2年目）に学校全体で取り組んでいく。

注1）平均正答率の国との比較：P（ポイント）

国A：-1.2P 国B：-2.4P 算A：-0.4P 算B：-4.3P 理：-5.1P

注2）児童質問紙との比較：P（ポイント）

国語の勉強が好き：-14.1P 読書が好き：-5.6P

(2) 校内研修について

全国学力・学習状況調査の分析と学校評価の結果から、本校の研修の在り方についても見直しが必要であった。

これまでは、全国学力・学習状況調査結果から見える課題と校内研修の目指す

子供像とにずれがあった。このため、調査結果から見える課題を校内研修の中心に位置付け、全国学力学習状況調査の結果＝本校児童の課題とした。

また、授業の在り方については、教師主導型の授業が多く対話を通して考えを深める場が少ない、単元構想を共通理解した共通実践が不十分である、学年での研修を深めたい、等の課題が挙げられた。

(3) 読書環境の整備

学習を支える読書環境の整備も重要である。学校図書室の貸し出し本のバーコード化の作業、図書室の環境整備が不十分である。また、国語科の授業で全学年並行読書を行っていく関係で、いつ、どのような本を、どのように集め使用していくかを計画、実施する必要がある。

2 協力校としての取組状況

(1) 学力向上のための授業改善について

上記の課題から、平成 28 年度の研修主題を「自分の考えを伝える力が育つ授業づくり」と押さえ、「目的に応じて自分の考えを整理し分かりやすく伝えられる子」を目指して取り組むことになった。この目指す子供像にせまるために、国語科の授業改善を研修の一番の柱として取り組んだ。

全員参観の中心授業を大研究とし、その前時・事後の時間での授業研究を小研究とし、全員が必ず授業公開するようにした。その時に、単元構想を共通理解するため、「単元デザインシート」を用いて授業を構想するようにした。

【単元デザインシート 4年ごんぎつね】

単元名	(4)年 ごんぎつね	単元学習	デザインシート
Plan (単元の見通し)		Check (単元の振り返り)	
1 付けたい力	文章を読んだことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いがあることに気付くこと。	1 付けたい力の振り返り (単元の目標がどの程度身に付いたか)	「ごんぎつね」や新美南吉の作品を読んで、考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いがあることに気付くことができた。
2 付けたい力を付けるために位置づける言語活動	「お気に入り」の場面から「すきなんだカード」で紹介し、話し合う。	2 位置づけた言語活動の振り返り (児童の実態と単元の目標に照らして適切だったか)	ごんと兵十の行動や気持ちが表れている場面から、好きな場面を見つけ同じ場面を選んだ人と交流し、選んだ理由を交流することで感じ方の違いに気付くことができた。並行読書で新美南吉作品の良さに気付くことができた。
3 単元の流れ (活動内容と手立て)	1次: ①教師のグックトークを聞く。 ②学習計画を立てる。 2次: ③出来事・登場人物についてまとめる。 ④ごん・兵十のすきなところを「すきなんだカード」に書く。 ⑤友達と交流し、自分と同じだったか違う考えがあったかを付箋に記入し話し合う。 3次: ⑥新美南吉作品についても「すきなんだカード」に書いて話し合う。	3 単元の流れの振り返り (手立てが有効だったか)	・教師のグックトークを聞いたことで、新美南吉の作品を読みたいという気持ちをもたせることができた。 ・好きな場面の中から、好きなところを見つけて理由をつけて説明することができた。 ・紹介者の紹介の仕方、聞き手の聞き方を提示することで、交流が進められる(深められる)ようになった。 ・どくろとぶろーの付箋で同じ内容や違う内容を書き分けた。「同じことまたは違うこと」を書こうという意識が子供にあり、効果的であった。 ・理由を説明するときは、本文の「〇〇の場所」という説明入れた方が相手に気持ちを伝えることができると感じた。
4 評価の場面 (どの場面で、どのようなことができればよいか)	・お気に入りの場面をみつけて、自分の考えをカードに書いている。 ・「すきなんだカード」の交流から、友達のことを聞き、共通点や相違点を話し合っている。	4 評価計画の振り返り (教師が見取ることができたか)	ワークシートやノート、交流したときの付箋をもとに評価をした。並行読書は、掲示してある読書シートにより何冊も読んでみたかった。
		Action (今後にかかわる改善点)	「ごんぎつね」では、心情や情景描写について読み探めることができたが、新美南吉の作品の読み、読書家を増やすことはできたが、内容を読み探めることは難しいと思う。本の関数を増やしてほしいと思う。

この「単元デザインシート」は、付けたい力を明確にし、そのための単元を貫く言語活動を設定し、授業実践後に振り返りを行うためのシートである。

このシートを用いて単元構想を練り、学年全体で授業に取り

組んだ。大研究の授業公開を中心に据え、その前後の時間を小研究の授業公開として計画し、平成 29 年 2 月までに全教諭の授業公開を行った。

大研究の授業公開、全体研修には、可能な限り県のサポートチームの派遣を要請し、指導を仰いだ。同時に、湖西市教育委員会からも指導主事、研修指導員の派遣を要請した。

【平成 28 年度の研修のあゆみ】

月	内 容 等
4 月 7 日 (木)	全体研修 指定研究について、研修の方向性について
4 月 22 日 (金)	静西教育事務所地域支援課総括指導主事、主任指導主事、湖西市教育委員会から研究指定についての説明
4 月 25 日 (月)	全国学力学習状況調査の校内採点結果の速報値を校内で共有
6 月 1 日 (水)	第 1 回学力向上推進協議会に校長出席
6 月 3 日 (金)	全体研修 研修の方向性、国語科の授業改善について
6 月 6 日 (月)	全体研修 県によるサポートチーム派遣（静西教育事務所地域支援課主任指導主事） 国語科の授業改善及び校内研修の効果的な方法について
6 月 8 日 (水)	提案授業（4 年）、全体研修
6 月 22 日 (水)	全体研修 「授業づくり」データベース、国語科映像指導資料、年間研修計画について
8 月 9 日 (火)	全体研修 県によるサポートチーム派遣（総合教育センター指導主事） アクティブラーニングとカリキュラムマネジメントについて
8 月 31 日 (水)	全体研修 2 学期の研修について、国語科「読むこと」について DVD の視聴からグループワーク、国の教育施策について
9 月 28 日 (水)	2 年大研究（国語）、全体研修 県によるサポートチーム派遣（地域支援課主任指導主事）
10 月 6 日 (木)	第 2 回学力向上推進協議会に校長出席
10 月 12 日 (水)	6 年大研究（国語）、全体研修
11 月 16 日 (水)	地域支援課定期訪問 5 年中心授業（国語） 4 年中心授業（算数）
11 月 28 日 (月)	第 3 回学力向上推進協議会に校長出席
12 月 1 日 (木)	1 年大研究（国語）、全体研修 県によるサポートチーム派遣（静西教育事務所地域支援課主任指導主事）、湖西市教育委員会指導主事・研修指導員
1 月 20 日 (金)	教育課程編成部会検討会（学びの充実部） 湖西市教育委員会指導主事
1 月 24 日 (火)	3 年大研究（国語）、全体研修 県によるサポートチーム派遣（静西教育事務所地域支援課主任指導主事）、湖西市教育委員会指導主事・研修指導員
2 月 8 日 (水)	国語科標準学力調査（3～5 年）実施

(2) 校内研修について

単元デザインシートを一つの共通のツールとして用い、大研究（中心授業）を核に据え、その前後に小研究の授業を組み、学年で連続した授業研究に取り組むようにした。検討する時間を生み出すために、週の行事予定に学年研修の時間を明記し、学年全員が揃って授業改善について検討するようにした。

大研究後の全体研修では、大研究に至るまでの学年での取組や今後の流れもよく分かるようになり、単元を通して児童の学力向上に向けての授業構想について、的を絞った話し合いが行われるようになった。KJ法を用いた話し合いの後に、県のサポートチーム（静西教育事務所地域支援課）の主任指導主事、湖西市教育委員会指導主事・研修指導員から、本時の授業、単元構想、今後の校内研修への助言をいただいた。

(3) 読書環境の整備

湖西市から派遣されている図書館司書、保護者が中心の図書ボランティアの方々と、昨年度中から整備を進めていた貸し出し本のバーコード化が完成した。また、移動式ラック、図書室テーブルの新調等、図書室整備が行われ、学校図書室の整備を行った。

この他にも、図書ボランティアによる朝の時間の低学年への定期的な読み聞かせや昼休みの読み聞かせなども継続して取り組んでいる。

並行読書のためには、司書教諭と図書館司書が中心となり、新居図書館、湖西市中央図書館の協力を得て、各学年で随時準備することができた。

3 取組の成果の把握・検証

(1) 授業改善による学力の定着、向上について

ア 定着度調査（○＝上回っている △＝同じ ×＝下回っている）

(ア) 県との比較（平成29年1月実施）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語	○	△	×	○	×	○
算数	○	○	○	○	○	○

(イ) 経年比較（平成27年度と平成28年度との比較）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語		○	△	○	△	○
算数		○	△	△	△	△

このことから、全学年で国語科の学力向上まで至ってはいないが、昨年度との比較を見ると、少しずつではあるが、確実に学力は向上している。

標準学力調査は、2月に実施したため、その結果は3月になる。

イ 学校評価による授業内容の変化

(ア) 教師側

【単元デザインシートをもとに、学年全体で国語科の授業改善を進めた】

	そう思う	だいたいそう思う	あまり思わない	思わない
H28	71.9%	28.1%	0%	0%

【子供たちは、自分の考えを進んで伝え合っている】

	そう思う	だいたいそう思う	あまり思わない	思わない
H28	5.7%	71.4%	22.9%	0%
H27	5.9%	67.6%	26.5%	0%

(イ) 児童

【授業中、友達や先生の話をよく聞いている】

	そう思う	だいたいそう思う	あまり思わない	思わない
H28	58.9%	36.0%	3.3%	1.8%
H27	45.3%	36.5%	6.6%	1.6%

【自分の考えを友達や先生に伝えることができている】

	そう思う	だいたいそう思う	あまり思わない	思わない
H28	47.6%	37.1%	13.0%	2.3%
H27	37.2%	35.6%	21.9%	5.3%

単元全体の授業をどのようにデザインしていくか、デザインシートを活用して構想し、授業実践を積み重ねていることで、教師の意識が高まり、児童自身の学びの充実が図られていることが分かる。

(2) 校内研修への手応え

【校内研修は、授業力や指導力を高め合う場になっている】

	そう思う	だいたいそう思う	あまり思わない	思わない
H28	47.2%	52.8%	0%	0%
H27	20.6%	64.7%	14.7%	0%

教師自身、どのような情報が必要かを考え、県のサポートチーム、湖西市市教育委員会からの講義もお願いしてきた。また、大研究後の全体研修では、前時の様子、今後の予定も含めて単元全体に対しての意見を出し合うことで、全体研修会が非常に活発になった。ここでの話し合いを基に次時以降の授業について微調整が図られ、単元終了後には学年での振り返りを行う PDCA サイクルで進めてきた。このため、校内研修を活性化させることができた。

(3) 読書環境の整備による変化

【1か月に8冊以上の本を読んでいる】

	そう思う	だいたいそう思う	あまり思わない	思わない
H28	45.7%	27.8%	15.0%	11.5%
H27	44.4%	28.5%	16.8%	10.3%

【「おすすめの本80冊」から学年目標冊数の2/3を完読した】

	そう思う	だいたいそう思う	あまり思わない	思わない
H28	56.9%	18.4%	12.1%	12.7%
H27	62.4%	14.9%	13.0%	9.7%

市の図書館司書、保護者中心の図書ボランティアの方々を中心に、学校図書室の環境整備が整い、図書室利用者が非常に増えた。図書室での貸し出し数は、教師の用意した並行読書も行いながらのため特に向上したとは言えないが、読書量全体としては増加している。

4 今後の課題

平成29年度は、国語科の授業改善を進めつつ、国語科を核とした教科横断的な授

業づくりにも取り組んでいく。この横断は、「目的に応じて自分の考えを整理し分かりやすく伝えられる子」に迫るためのものであり、国語科の授業改善の重要な視点として捉えている。そのために、「横断デザインシート」を活用し、横断のタイプを「活用型」「連携型」「材料型」「サポート型」と分類し、研究・実践を積み上げていきたい。

月	内 容 等
4月	全国学力学習状況調査6年 国語科標準学力調査（3～5年）
5月	全国学力学習状況調査事項採点・分析 授業研究、県によるサポートチーム派遣
6月	授業研究、国語科標準学力調査の分析
8月	1学期の実践の共有化、2学期以降の計画、全国学力学習状況調査分析：検証・共有化
9月	授業研究、県によるサポートチーム派遣
10月	研究のまとめ、県によるサポートチーム派遣
11月	14日（火）研究発表会
12月	研究のまとめ
3学期	30年度に向けた研究計画